坂口　真康（筑波大学大学院／共生教育学）

アメリカン・ヒストリー X

（原 題 ： American History X）



- 種別：Blu-ray Disc（映画）
- 監督：トニー・ケイ
- 製作年：1998 年
- 製作国：アメリカ合衆国
- 発売／販売元：ワーナー・ホーム・ビデオ
- 税込価格：ブルーレイ ￥2,500 ／DVD ￥1,500
- 時間：本編 119 分
- 音声：英語・日本語
- 字幕：日本語・英語・日本語吹替用字幕

あらすじ

白人至上主義を掲げるギャングのリーダーであった兄デレクに影響を受けたダニーは、高等学校の歴史の授業において、アドルフ・ヒトラーの『我が闘争』を題材としたレポートを提出した。そのことを懸念したスウィーニー校長は、ダニーに『アメリカン・ヒストリーX』という名の新たなレポートを課す。その内容は、兄デレクが刑務所に投獄された経緯の分析と、そのことが現代のアメリカ合衆国におけるダニーの生き方をどう変え、ダニーや家族にどのような衝撃を与えたのかについて分析するという内容であった。

本作品で描かれているのは、アメリカ合衆国で起きている異なる人種間の摩擦の渦に飲み込まれ、怒りや憎しみの感情に翻弄されながらも、そこから抜け出そうとする兄弟の物語である。

シーン再現

＜刑務所内の回想シーンにおいて、デレクがスウィーニー校長に、弟のダニーが自分と同じ道を歩んでいることについての感想を聞かれる場面＞

Chapter	
1. オープニング／2’40	18. デレクとダニーの会話／1’05
2. 過去の事件／3’48	19. 刑務所での居場所／3’00
3. ダニーのレポート／1’38	20. 作業仲間との出会い／3’06
4. 『アメリカン・ヒストリーX』／2’53	21. 母の刑務所訪問／3’58
5. トイレの出来事／5’01	22. ある出来事の目撃／3’12
6. ベニス・ビーチ／1’16	23. 作業仲間との会話／2’34
7. コートの賭け／4’58	24. 刑務所での事件／6’52
8. デレクの出所／6’46	25. 怯える日々／2’45
9. 家族の決意／4’19	26. デレクの教え／3’58
10. デレクのスピーチ／4’26	27. 父の存在／3’59
11. 店の強襲／2’51	28. 胸のしるし／1’46
12. デレクとマレーの議論／10’00	29. 新しい朝／2’00
13. 母との約束／1’35	30. デレクへの要請／5’20
14. 過去の事件の回想／4’23	31. 怒りと憎しみの結末／2’30
15. パーティー／3’17	32. ダニーの結論／1’17
16. デレクとキャメロン／5’44	33. エンド・クレジット／3’30
17. デレクの脱会／1’53	

※ チャプター・タイトルは、内容がわかるように筆者が補った

デレク：誰がうれしいもんか。自分でも混乱してるんだ。もう自信がない。今までの狂信的な自分がウソのようだ。
校長：だろうな。君のような聡明な男なら矛盾に気づくはずだ。
デレク：主義を捨てたとは言ってないぞ。
校長：自然体でいろ。今の君は消耗し考える力もマヒしてる。
デレク：あんたは昔から俺を分析したがる。俺の心が読めるのか？
校長：私も怒りをためて生きてきた。君と同じだ。
デレク：同じって何が？
校長：若い頃全てに腹を立ててた。私たち黒人に対する差別や侮辱。いわれのない苦しみ。私は白人を恨んだ。神や社会を憎んだ。だがいくら怒っても答えは出ない。怒りは君を幸せにしたか？
デレク：（小さく首を横に振る）・・・。助けてくれ。頼む。ここを出たい。

教育学の視点から

本作品はアメリカ合衆国における人種差別の問題について取り上げた作品ではあるが、頭ごなしに白人至上主義を否定し、人種融和を啓蒙するような作品ではない。その点は、上述したスウィーニー校長とデレクのやりとりにも見てとれる。スウィーニー校長はデレクに対して、「人種差別をするな」や「非白人とも仲良くしろ」といった規範を押しつけるような口調では語りかけない。むしろここでスウィーニー校長がデレクに目を向けさせようとしているのは、主義や価値観そのものではなく、終わりのない怒りや憎しみに翻弄された人生を送ることの虚しさであり悲しさなのである（そのようなスウィーニー校長の働きかけにデレクは心を揺さぶられ、彼に助けを請うのである――彼はデレクがそれまで徹底的に怒りや憎しみをぶつけてきた「非白人」のカテゴリに属するにもかかわらずにである）。

このスウィーニー校長とデレクのやりとりを教育学の視点から見たとき、そこでは、必ずしも主義や価値観を根底から覆そうとしなくとも、怒りや憎しみに翻弄されることの虚しさや悲しさに気づかせることができれば、人と人のつながりを生み出すことは可能である、という点が示されていることが読みとれる。すなわちここでのやりとりでは、人と人がつながるということは、主義や価値観の違いを解消した上にのみ成立するものではなく、それらの違いを抱え込んだ上においてでも成立しうるものだという点が示されているのである。そしてそのような人と人のつながりを生み出す上で鍵となるのが、「怒りにまかせるには人生は短すぎる」（ダニーのレポートの結論より）ことへの気づきを促すことであるといえる。

Information

【書籍】
板倉厳一郎、「アメリカン・ヒストリーX」、奥村みさ・スーザン・K・バートン・板倉厳一郎、『映画でわかるアメリカ文化入門』、pp. 155-160、松柏社、2007 年